

7月24日(月) ドキュメンテーション研修  
講義・グループワーク(リーダー向け)を実施しました。

神戸大学大学院 准教授 北野 幸子先生によるリーダー向けのドキュメンテーション研修では、園の保育のリーダーである先生や、これから更にドキュメンテーションを学びたいという先生など、とてもたくさんの方々に参加していただきました。

講義では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」(以下:「10の姿」)について、詳しくお話を伺うことで、「10の姿」とは子どもを見る時の視点であることや、学びや育ちを第三者に伝えやすくするための道具であることを具体的に学ぶことができました。

研修に参加した皆さんから、前向きな意見や感想が多数聞かれ、学びの多い研修会となりました。

## 参加園

永福保育園	朝日幼稚園
岡田保育園	朝来幼稚園
さくら保育園	池内幼稚園
相愛保育園	シオン幼稚園
タンポポハウス	橋幼稚園
なかすじ保育園	中舞鶴幼稚園
東山保育園	三鶴幼稚園
八雲保育園	舞鶴幼稚園
やまも保育園	
ルンビニ保育園	※50音順
うみべのもり保育所	
中保育所	
西乳児保育所	

～参加者からの意見・感想を一部ご紹介します～

- ・「10の姿」について、到達目標ではなく、子どもをより丁寧に見るための視点、理解を深めるための視点という話を聞きよくわかった。
- ・子どもに育ってほしい視点を持って、日々の子どもの姿をとらえることの大切さを学ばせていただいた。
- ・乳児の中にも育つであろう「10の姿」を見通していくことも大切だと思った。
- ・幼児期から学習的なことを進めるよりも、人として根本的に大切な思いやりだったり、人との関わりを体験、経験を通して身につけることが大切だと改めて感じた。
- ・遊びや生活を通して、を大切に保育をしていきたいと思った。



## 講義『子どもの姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」でとらえ、可視化、発信するには』

「10の姿」は子どもを見る時の視点であり、遊びの中の学びや育ちを伝えやすくするための説明言語である。

～北野先生 講義より～



## 【幼児期の終わりまで育ってほしい10の姿について】

◎「10の姿」とは、新しいものではなく、今までの保育所保育指針や幼稚園教育要領の5領域にあったものを小学校にも伝わるように具体的にしたもの。

◎「10の姿」を使い、遊びや生活の中での育ちや学びを可視化することで、小学校の先生や保護者など実践を見ていない人にも伝わりやすくなる。

## 【10の姿の捉え方】

◎「10の姿」は、5歳までにすべてが育っていないといけないものでもなく、また、0～2歳に見えなくてはいけないものでもない。

◎0歳児の砂遊びでは、自然に興味を持つ

て関わるのが「豊かな感性と表現」につながっていく育ちであり、この経験の積み重ねが4、5歳にどうつながっていくのか、という思いで見えていくことが大切。

◎乳児保育で大切にしたい色・音・形・動き・触覚などは、「豊かな感性」「数量・図形」「言葉」「思考力」につながるけれど、今は見られなくてもよい。

◎「10の姿」は早く見れば良いものではなく、見られないからいけないものでもなく、子どもをより丁寧に見ていく(洞察していく)視点である。

◎「10の姿」によりチェックするのではなく、保育の遊びの検証や遊びの現実をより洞察するために活用する。

◎「〇〇してた」で終わるのでなく、「これが〇〇の育ちにつながる」という視点を持って子どもを理解することが大切である。

## 【可視化・発信】

◎ドキュメンテーションのタイトルは、活動

ではなく、気持ち・育ち・学びをタイトルにするとよい。

◎遊びは育ちにつながる単なる手段。子どもは遊ぶことが目的でよいが、保育者は遊びが目的ではなく、こんな気持ち・育ちがあってほしいという願いを持つことが大切である。

◎「10の姿」はあくまでも道具。子どもを見る時の視点であり、遊びの中の学びや育ちを伝えやすくするための説明言語である。



「〇〇してたな」で終わるのでなく、「これが〇〇の育ちにつながる」という視点を持って子どもを理解することが大切。

～北野先生 講義より～

## グループワーク(内容) ～事例の中の子ども達の育ちや学びを「10の姿」で捉える～

11グループ(1グループ4人～5人)に分かれて行ったグループワークでは、はじめに、事例のドキュメンテーションを基にワークシートを活用しながら、遊びの中の育ちや学びを読み取りました。その後、北野先生より「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」について講義を受け、もう一度、グループで学びや育ちが「10の姿」のどこにつながっていくのかを検討していただきました。講義後にさらに協議することで、「10の姿」への理解も深まり、それぞれのグループで活発な意見交換が行われました。

グループワークの感想では、「自分の気付かなかった意見が聞けることで、違った視点で考えられる良い機会」「グループワークの大切さを改めて感じた」「園内でもグループワークなどを積極的にしていきたい」という声も多数聞かれました。事例を基に保育について語り合うことは、自分自身の保育を振り返る機会にもなります。このようなグループワークを園内研修などでぜひ取り入れてみてください。

### [グループワークの進め方]

- ①ワークシートの視点にそって事例を読み取る
  - (1)きっかけ(子どもの興味・関心から)
  - (2)子どもの姿、思い
  - (3)保育者の関わり、意図、ねらい
  - (4)環境(意図的な環境設定)
  - (5)学び、育ち
  - (6)あなたが保育を展開するとしたら…どんな環境を準備するか?どんな言葉をかけるか?
- ②①についてグループ内で検討する
- ③事例の中の学び・育ちは「10の姿」のどこにつながっているのかを検討する
- ④グループワーク終了後、「10の姿」について検討したことを各グループごとに発表する

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の明確化(整理イメージ)



引用：中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会  
幼児教育部会(第10回)配付資料(H28.10.31)

### 【0歳児事例】 A1歳6カ月黒シャツ B1歳6カ月青シャツ

Aくんが、砂を入れた容器を持ってテーブルのところへやってきた。容器から砂を入れたり出したりを繰り返した後、おでこの高さから指先をこするようにして少しずつ砂を落とす始める。少しずつ砂を落とすために、指先に細心の注意をはらって調整している。保育者も一緒に砂を落としてみた。テーブルの上が砂でいっぱいになると手を広げて、手のひら全体で砂をなでるように混ぜ、その感触を感じていた。



### [グループ発表より]

- ・砂遊びなどの経験は【健康な心と体】の育ちにつながる。
- ・友だちの真似をして遊ぶ姿(1歳年りの真似っこあそび)は【協同性】の育ちにつながる。
- ・「パラパラ」と言う保育士の言葉を受けて真似していることから、保育士の言葉から学んでいる姿が見られる。【言葉による伝え合い】の育ちにつながる。

これらの事例に挙げた10の姿は、0歳や3歳に今現在この力が育っているというのではなく、この経験の積み重ねが、後に「10の姿」へとつながっていく、という捉え方をしています。

また、1つの遊びの中に「10の姿」は1つではなく、色々な育ちにつながる姿があるということが事例を読み解くことで見えてきます。

### 【3歳児事例】

赤土の山のくぼみに流し込んだ水で遊び始めた。そのうちに中に入り手や足で感触を確かめている。また、水の流れるに興味を持った子ども達が、川をつくったり、水の中で足を速く動かして流れを変えたりして楽しんでいた。



### [グループ発表より]

- ・水が流れていっぱいになることに気づいていることから【数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚】の育ちにつながる。
- ・「ぼくも一緒にしてあげる」という言葉や、一緒に川を作る姿から【協同性】の育ちにつながる。

## 第2回舞鶴市保幼小接続カリキュラム策定会議 7月13日

第2回の策定会議では、グループに分かれ保育所・幼稚園から収集した0歳～5歳までの事例を基に、子どもの学びや育ちを「10の姿」で捉えるための協議を行いました。協議後の意見交換では、「同じ遊びの中にも、その年齢ごとの学びがあり、それを「10の姿」でとらえていくことで、その学びが繋がっていることがわかる」「様々な経験の積み重ねが学びにつながる」など、「10の姿」は遊びの中の学びや育ちを伝え、つなげていくツールであることを共有しました。

第3回の策定会議は、保幼小連携活動から事例を収集し、カリキュラムの策定に向け、事例研究等を行っていきます。

